

# どこに転がっていくの、林檎ちゃん

## ——ロシア内戦時代の革命ソングとその文化的越境をめぐる

田中壮泰

### I 英語のサブカルチャー

ロベルト・ボラーニョ Roberto Bolaño (1953-2003) や多和田葉子 (1960-) など、英語圏以外の作家についての言及もあるものの、小説家としては主に J・M・クッツェー J. M. Coetzee (1940-)、カズオ・イシグロ (1954-)、ジャメイカ・キンケイド Jamaica Kincaid (1949-)、モースン・ハミッド محسن حامد / Mohsin Hamid (1971-) を論じたレベッカ・ウォルコウィッツ Rebecca Walkowitz (1970-) の『生まれつき翻訳』*Born Translated* (2015) が読者に提示しているのは英語文学の多様性です。クッツェーにおいては南アフリカとオーストラリアの英語、キンケイドにおいては英領アンティグアの英語、あるいは本書の序章で論じられているジュノ・ディアス Junot Díaz (1968-) においてはドミニカ系アメリカ人の英語が、そのような多言語的な英語文学の発展に貢献してきました。

他方で、本書には村上春樹 (1949-) の名が上がっていますが、彼を含め、英語以外を執筆言語とする作家のなかにも、英語で書かれ、英語に訳されてきた文学の強い影響から出発した作家はたくさん存在しています。日本語から英語、英語から日本語というように、双方向的な翻訳からなる比較文学の可能性も、本書には萌芽的に示されていたと言えそうです。

そしてそのとき、とりわけ英語の世界的な影響を考えるならば、文学だけでなく、というか文学以上に、サブカルチャーの影響をどう捉えるかが問題になります。音楽や映画をはじめとする様々な英語圏文化は、様々な言語に翻訳され、それが世界各地の文学に少なからぬ影響を与えているからです。「英語」と「翻訳」をキーワードに世界文学を論じるならば、サブカルチャーの影響を無視するわけにはいきません。

東欧に目を向ければ、英語圏のサブカルチャーの影響下で小説を書いた作家のなかに、例えば、現在のウクライナ西部に位置するオーストリア帝国領東ガリツィア出身のユダヤ系ポーランド語作家ブルーノ・シュルツ Bruno Schulz (1892-1942) がいます。『生まれつき翻訳』においては、1963年のツェリナ・ヴィエニェフスカ Celina Wieniewska (1909-1985) による優れた英訳によってその作品が広く英語圏に知られ、フィリップ・ロス Philip Roth (1933-2018) やシンシア・オジック Cynthia Ozick (1928-) などの英語作家に影響を与える形で、その死後に英語文学の仲間入りを果たした作家として紹介されていますが、シュルツは生前からすでに翻訳を通じて英語文化と深い結びつきを持っていました<sup>1)</sup>。例えば、シュルツの短編集『サナトリウム砂時計』*Sanatorium pod Klepsydrą* (1937) の冒頭に収録された「書物」Księga という短編では、作家の幼年時代における英語のポピュラーソングとの出会いが、ユゼフという少年の思い出として語られています。

ある日、ユゼフは台所で雑誌に読み耽っていた女中のアデラに近づき、その肩越しに覗き見た雑誌のなかに手回しオルガンの広告を発見します。その瞬間、少年の想像力は記憶のなかの路地へと飛躍することになります（図1）。

しらじらと曇り日の午前、寒さでかじかんだ午前〔中略〕老人たちは人知れず雑踏から離れて、四つ辻に組み立てた台の上に手回しオルガンを載せた〔中略〕彼らはいつものメロディーを奏で始めた、それも曲の出だしならぬ、きの中断した箇所をつづきで「デイジー、デイジー、返事を聞かせて……」と鳴り立てた。<sup>2)</sup>

「デイジー、デイジー」というリフレインを持つこの歌は、1892年にイギリスのシンガーソングライター、ハリー・ダクレ Harry Dacre (1857-1922) によって作詞・作曲され、同年にイギリスとアメリカで大ヒットした「デイジー・ベル」*Daisy Bell* という歌が元になっています。後年、アーサー・C・クラーク Arthur C. Clarke (1917-2008) が脚本を担当し、スタンリー・キューブリック Stanley Kubrick (1928-1999) が映画化した『2001年宇宙の旅』*2001: A Space Odyssey* (1968) のなかでコンピュータの HAL9000 が歌っていた歌と言え、ばピンとくる人は少なくないでしょう。

この歌は、オリジナルが発表された3年後の1895年に、精神科医でもあったユダヤ系ポーランド語詩人ヴワディスワフ・ステルリンク Władysław Sterling (1877-1943) によってポーランド語に翻訳され、ポーランドでも流布することになりました。

詩や小説のような活字のみの文化に比べて、歌はメロディやダンスに乗って言語や文化の垣根を容易に飛び越えてゆきます。そしてそのとき、忘れられる歌もあれば、個人の特別な体験と結びついて記憶される歌もあり、ユゼフという少年にとっては、英語からポーランド語に翻訳された「デイジー・ベル」が、そのような特別な歌のひとつでした。というのも、ユゼフがこの歌を想起したその時、その場所で、彼はアデラの肉体に対する性欲の目覚めを体験していたからです。



図1 シュルツによる「書物」の挿絵

その冬のある日、掃除仕事のアデラが床ブラッシを片手に書見台に凭れているところへ来合わせた私は、そこに何やらちぎれた古雑誌の片割れが載っているのを見かけた。私はアデラの肩に倚りかかった、それは好奇心からよりは、またもや彼女の体の匂いに酔いしれてみたかったからである。彼女の肉体の若々しい魅力が目覚めて間もない私の官能に露になり始めていたころだった。<sup>3)</sup>

「私の心に愛が咲いた。デイジー、デイジー、真っ赤なバラのつぼみのように爽やかで芳しい

おまえ」<sup>4)</sup>という歌い出しで始まる、この甘ったるいポップソングは、ユゼフの頭の中ではアデラの声で再生されていたはずです。

これまでシュルツに関してリルケ Rainer Maria Rilke (1875-1926) やカフカ Franz Kafka (1883-1924) などドイツ語文学の影響が語られることはありましたが、シュルツが英語のサブカルチャーにも翻訳を通じて深い影響を受けていた、数多くの東欧の作家の一人でもあったという点はここで強調しておきたいと思います<sup>5)</sup>。アメリカン・ポップスの世界的な影響力は村上春樹だけでなく、その何世代も前の、インターネット以前の東欧の作家にまで及んでいたということです。

## Ⅱ ロシア語の革命ソング

しかし、これはポストコロニアル研究が散々議論してきたことですが、多言語的な文化越境について語るとき、その負の側面にも目を向ける必要があります。ひとりひとりの記憶のなかには、例えばシュルツ（あるいはユゼフ少年）にとっての「デイジー・ベル」がそうであったように、幸福な記憶と結びついた歌もあれば、できることなら忘れてしまいたい、忌まわしい体験と結びついた歌もあり、とりわけ植民地主義を経験した土地に後者の歌が多いことを、我々はよく知っているからです。

そのような歌のひとつに、革命後のロシアと東欧で流行した林檎の歌があります。

第一次世界大戦の勃発後にロシアはドイツ・オーストリアとの帝国間の戦争に突入しますが、ロシア軍の相次ぐ敗退と長引く戦争の結果、1917年2月に革命が勃発し、まずはロシア帝国が崩壊し、代わって成立したロシア臨時政府も同年10月の革命によって解体し、その結果、ロシアとウクライナの全土で、革命派と反革命派とがぶつかり合う内戦が展開しました。そして、この時期に、「Яблочко」（林檎ちゃん）のタイトルで知られる革命ソングが流行しています。

この歌はイデオロギーや民族の違いを越えて様々なパロディが作られました。例えば、赤軍兵士たちのあいだで歌われていたバージョンのひとつでは、ウラル山脈の東、シベリアのオムスク Омск に「臨時全ロシア政府」（Временное Всероссийское правительство）を建国した白軍総司令官アレクサンドル・コルチャーク Александр Колчак（1874-1920）の運命が、転がる林檎に重ねられて歌われています。

おい、林檎ちゃん  
横っ面はまだ青い。  
ウラルの向こうのコルチャークに  
ウラルを越えさせてなるものか！

Эх, яблочко,  
Сбоку зелено.  
Колчаку за Урал  
Ходить не велено!

しかし同時に、同じ歌のなかで、シベリアの前線に向かう赤軍兵士たちもまた、転がる林檎として歌われました。

おい、林檎ちゃん、  
ガラスのようにつやつやの。  
革命は進むよ  
社会主義の。

汽船がゆくよ  
波止場を過ぎて  
向かうは前線  
われら коммунист。

Эх, яблочко  
Да ты хрустальное.  
Революция идёт  
Социальная.

Пароход плывёт  
Мимо пристани.  
Мы на фронт идём  
Коммунистами.<sup>6)</sup>

ところで、ロシアとウクライナには「頻繁に」を意味する「チャスト」 часто をもじった「チャストウシカ」 Частушка（ウクライナ語では「チャスティフカ」 Частівка）と呼ばれる風刺詩の伝統があり、林檎の歌はその伝統のなかから生まれたものとされています。しかし、メロディのルーツには諸説あり、ウクライナの民謡やモルドヴァの民謡、あるいはイギリスの船乗りの間で親しまれた「ホーンパイプ」Hornpipe と呼ばれるフォークダンスがロシアの民族舞踊「バーリニャ」Барыня と混ざってできたとも言われています。そして、それが黒海艦隊の水兵のあいだで広まり、ロシア革命の時代に赤軍、白軍、その他の諸集団によって、さまざまなバージョンが歌われるようになりました<sup>7)</sup>。

黒海艦隊と言えば、コルチャークがそこで一時期（1916年8月から1917年6月まで）司令長官を務め、ロシア革命後は反革命派の主力の一つとなったことで知られていますが、民族的にはウクライナ人水兵の割合がもっとも多くを占めていたとも言われています（8割近くとも）<sup>8)</sup>。1918年4月にドイツ軍が黒海の主要基地セヴァストポリ Севастополь をボルシェヴィキから奪回すると、黒海艦隊の大部分は、同じ頃にドイツの傀儡政府としてキエフに建国されたウクライナ国の海軍に編入されています<sup>9)</sup>。つまり、林檎の歌は現在ではロシア語の歌（Яблочко）として知られていますが、当時の水兵たちが歌っていた元のかたちはウクライナ語の歌（Я

блучко)であった可能性が高いということです。いずれにせよ、大衆歌を考えると、とりわけそれがロシアやウクライナのような多民族・多言語的な地域で歌われたものである場合、オリジナルの言語を問うことには意味がないと言えます。

「読者が「ネイティヴ読者」であることを阻む」ということ、すなわち「自分が今手にしている本は自分たちのために書かれたのだ、今ページで出会っている言語は、独占的、本質的に、自分たちの国語なのだと決めてかかるような読者であることを阻んでくる」というウォルコウィッツによる「生まれつき翻訳」の定義は、そのまま大衆歌にも当てはまりそうです<sup>10)</sup>。

### Ⅲ 林檎の歌をめぐる小説

林檎の歌が人々の口を介して、さまざまな地域と言語で歌われてきたように、文学においても、この歌は、さまざまな言葉に翻訳されて記述されてきました。

例えば、皇帝派（カデット）の政治家の息子として内戦時代に赤軍に追われ、クリミアからロシアを脱出したあと、長期間のヨーロッパ滞在を経て、渡米後は執筆言語をロシア語から英語に切り替えて、英語作家として活躍したウラジーミル・ナボコフ Владимир Набоков (1899-1977) の英語小説に『見てごらん道化師を！』*Look at the Harlequins!* (1974) があります。作者ナボコフの自伝的な要素が多く散りばめられたこの小説の中で、内戦時代のロシアからポーランドへの逃亡を企てた語り手ヴァジム・ヴァジーモヴィチ・Nが、国境付近で赤軍兵士の一人に呼び止められたとき、赤軍兵士の口から真っ先に飛び出したのが、この林檎の歌でした。

国境を越えたかと思ったそのとき、小道のそばでビルベリーの実を摘んでいる最中の、モンゴル人の顔をした無帽の赤軍兵士が私に挑んできた。彼は切り株から帽子を拾い上げてこう言った、「どこへ転がっていくんだい（カーティシュチャ）、林檎ちゃん（ヤプロチュコ）？ ポカズィヴァイカ・ドクメンチキ（身分証を見せるんだ）」<sup>11)</sup>

あるいは、オーストリア帝国領プラハ出身のユダヤ系ドイツ語作家レオ・ペルッツ Leo Perutz (1882-1957) の小説『どこに転がっていくの、林檎ちゃん』*Wohin rollst du, Äpfelchen...* (1928) では、ロシアとの戦争に巻き込まれた一人のオーストリア軍兵士の運命が転がる林檎に重ねられています。

物語は第一次世界大戦の終結後、シベリアでの長い捕虜生活を終えてウィーンに帰還する、オーストリア軍兵士たちの列車の旅から始まります。主人公のヴィトーリンは捕虜時代に赤軍将校から受けた屈辱が忘れられず、その殺害を遂行すべく、ウィーンでの生活を捨て、内戦下のロシアに舞い戻ることを決意します。こうして、一人の赤軍将校を追跡しながら、戦地から戦地、街から街を移動するヴィトーリンの旅が始まりますが、その旅路で繰り返し彼は危機的な状況に陥り、その度に、ある時は赤軍、またある時は白軍、あるいはウクライナ軍兵士の助けを借りて危機を乗り越えるといった具合に、この小説は、民族やイデオロギーを異にする諸集団が入り乱れて争った内戦時代のロシアとウクライナの紛糾した状況を、ヴィトーリンの移動を通じて浮かび上がらせる仕組みになっています。

例えば、前線地帯の町ベルディチウ Бердичів で赤軍とウクライナ軍との戦争に巻き込まれ、足止めを食らったヴィトーリンは、この街でアルテミエフと名乗る社会革命党（エスエル）の活動家と知り合い、その協力のもと、モスクワへの潜入に成功することになりますが、「ドイツから来たのか。戦争捕虜か。どこへ行こうとしている」との質問に「モスクワです」と答えたヴィトーリンを前に、アルテミエフが思い浮かべるのもまた同じ林檎の歌でした。

アルテミエフが口笛で何かのメロディーを吹いた。ヴィトーリンははじめてその歌——ロシアのどこでも歌われている小さな林檎の歌を聞いた。

「どこに転がっていくの、林檎ちゃん、お池に落ちてしまうわよ——モスクワだと。狼どもから逃げて森に帰りたいのか」

「その狼の一匹に言ってやりたいことがあるのです」<sup>12)</sup>

第一次世界大戦においてロシアと激戦を重ねたドイツ・オーストリア軍は、1918年3月にウクライナ東部にまで戦線を広げ、キエフにウクライナ国を建国するなど、その後のロシアとウクライナにおける紛糾の火種を撒き散らします。しかし、その結果、戦後に敗戦国としてスタートしたドイツとオーストリアは、ロシアとの戦争による様々な後遺症に苦しむ人々を抱え込むことになりました。

そして、そこには外傷や戦争神経症を抱えた人々だけでなく、帰還後の社会に対する虚無感と喪失感に苦しむ人々も存在したことを、いくつかの文学作品が描いています。

例えば、そのひとつに、ユダヤ系ドイツ語作家ヨゼフ・ロート Joseph Roth (1894-1939) の小説『果てしなき逃走』 *Die Flucht ohne Ende* (1927) があります。第一次世界大戦でオーストリア軍兵士としてロシア軍と戦い、やがて捕虜となってシベリアで生き延び、終戦後は、あるときは白軍兵士として、またあるときは赤軍兵士として内戦下のロシアを放浪し、最終的にヨーロッパに帰還してからも、シベリアでの生活を忘れることができず、ヨーロッパ社会で孤立感を深めていくユダヤ系オーストリア人フランツ・トゥンダの逃亡生活がそこに描かれていました<sup>13)</sup>。

ロートと同じく、元オーストリア軍兵士のユダヤ系ドイツ語作家であるベルッツもまた帝国崩壊後に行き場を失うことになるユダヤ人の喪失感を、ロシアをさまようヴィトーリンの姿を通じて描いていたと言えそうです。

いずれにせよ、ロシアを脱出して西欧に亡命したヴァジム・ナボコフや、ロシアに出征し、その後、帰る場所を失ったヴィトーリンやトゥンダをはじめ、当時のロシアとウクライナには、さまざまな形で移動と越境を余儀なくされた人々が無数にいたということ、そして、そうした時代の世相を反映するものとして歌われていたのが林檎の歌であったということです。

#### IV 歌とトラウマ

英語圏の文化から影響を受けた非英語文学が膨大にあるように、ロシア語（とその隣接言語のウクライナ語）の文化から影響を受けた非ロシア語文学も膨大にあり、そこには、ロシア語

から英語に執筆言語を切り替えたナボコフはもちろん、ドイツ語でロシアを描いたペルッツのような作家も存在しました。さらに、ロシア出身者のなかには、ロシア語以外で書いた作家も少なくなく、その一人にロシア帝国領ウクライナ出身のイディッシュ語作家ドヴィド・ベルゲルソン דוד בערגעלסאן (1884-1952) がいます。

帝政ロシアの末期にキエフのイディッシュ語文学の中心的な作家として活躍し、内戦時代にキエフを去ってからヒトラーが政権をとるまでの10数年間をベルリンで過ごしたベルゲルソンは、このベルリンで、内戦時代の記憶を抱えて生きるウクライナ出身者たちを描いた小説をいくつも発表しています。その一つ、1926年に発表された短編小説「二匹のけだもの」 צוויי רוצחים は、内戦を生き延びた一人のウクライナ人の記憶がテーマになっていますが、ここでも林檎の歌は、今度は内戦時代のウクライナで勃発した「ボグロム」と結びつけられて登場することになります<sup>14)</sup>。

ロシア内戦はウクライナにおいて赤軍と白軍、ウクライナ軍とポーランド軍による三つ巴、四つ巴の戦闘として展開しますが、この内戦のさなかにウクライナの各地でユダヤ人の虐殺が勃発しています。

ロシア語で破壊を意味する「ボグロム」の名で呼ばれるこの時期のユダヤ人の虐殺は熾烈をきわめ、少なく見積もっても5万人ものユダヤ人が命を落としたと言われ、それ以上の数のユダヤ人が家を失い、ウクライナを後にしました。ベルゲルソンも、この時期にウクライナを去っています。

しかし、この同じ時期にウクライナからベルリンに移住した者のなかには、内戦時代にユダヤ人を虐殺したウクライナ人も少なからず存在していました。「二匹のけだもの」の主人公アントン・ザレンボはその一人として登場しています。しかも、彼は単に虐殺の加害者であっただけでなく、戦争によって自らの暴力的な衝動に歯止めが効かなくなり、知らず知らずのうちに犯罪行為に手を染めてしまった不幸な男として、この小説では描かれています。というのも、彼は自らの過去の行いに疾しさを抱き続けており、その記憶が、ふとしたきっかけで彼の脳裏に蘇り、彼を苦しめることがあったからです。

ザレンボが居住するベルリンのアパートには家主のドイツ人女性の他にテルという名の飼犬がいましたが、ある日、彼は家主から、赤ん坊を噛み殺したというテルの過去を打ち明けられます（タイトルの「けだもの」とはこの犬とザレンボを指しています）。そして、この話が引き金となって、ザレンボは同郷のユダヤ人を虐殺した自らの過去を想起することになるのですが、このとき彼の頭のなかで、殺されたユダヤ人の生首が転がる映像と一緒に流れるのが、林檎の歌でした。

アントン・ザレンボのあばた顔は悲しみと郷愁でいっぱいになった。寝室の床で首を咬み切られて死んでいたという血まみれの赤ん坊の話は、かつて彼が徒党を率いて略奪と虐殺をくり広げた、あのウクライナのユダヤ村で起きた似たような話を思い出させた。血を……ユダヤ人の家々で流れた血を思い出した。路上の血を思い出した。道にはガラスの破片が散らばり、さまざまな布切れが舞い、ユダヤ人の腸や血まみれの死骸が転がっていた。何体かは首がちょん切られていた——白髪混じりの髭をたくわえた生首もあった。男たち

は酔っている者も<sup>しらふ</sup>素面の者もいた。ザレンボと仲間の音楽隊は酔っている時もそうでない時も、当時の流行歌を歌った。

りんご、りんご！

ころりころりと、どこへゆく……<sup>15)</sup>

革命と内戦の時代にロシアとウクライナで流行した林檎の歌は、ナボコフにおいては亡命ロシア人、ペルッツにおいてはオーストリア人の内戦時代の運命を表現した歌として、それぞれ英語とドイツ語で歌われましたが、同じ歌は虐殺されたユダヤ人にも重ねられ、さらにそれが虐殺したウクライナ人のなかで生き続けていたということ。しかも、それはロシア語かウクライナ語かドイツ語かイディッシュ語か、何語で歌われていたとしてもおかしくない状況を、ベルゲルソンは「二匹のけだもの」のなかで描きました。

ウォルコウィッツの『生まれつき翻訳』から出発して、ポーランド語作家シュルツを経由し、多言語的なロシア語の世界まで一足飛びに見てきましたが、ここで確認しておきたかったのは、多言語的な英語文学、あるいはロシア語文学は、つねにその周辺の文学と隣接し、それを吸収しながら発展してきたということ。他方、周辺の文学もまた英語やロシア語の影響、とりわけサブカルチャーからの影響を強く受けながら発展してきたということです。そして、そうした双方向的な翻訳からなる比較文学を通じて浮かび上がる、さまざまな世界文学の姿があります。

このとき、忘れてならないのが、言語間の非対称性です。ある言語から別の言語への翻訳には、しばしば暴力が介在することがある、ということです。これまで、さまざまな文化接触がもたらす「豊かさ」については散々語られてきましたが、その「負の側面」にも、もっと目を向けていく必要があると思われます。多言語的な文化接触の経験は、ひとりひとりのなかで、(ユゼフ少年の「デイジー・ベル」のように) 幸福な記憶として残る場合もあれば、(ザレンボにとっての林檎の歌のように) トラウマ的な記憶として残ることもあるからです。

## 注

- 1) ただし、ウォルコウィッツは英語作家のシュルツ受容を批判的に論じている。シュルツの短編集『シナモン風味の店たち』*Sklepy Cynamonowe* (1934, 邦題は『肉桂色の店』)のツェリナ・ヴィエニェフスカによる英訳(『大鰐通り』*The Street of Crocodiles*)から9割近いテキストを削ってできた、ジョナサン・サフラン・フォア Jonathan Safran Foer (1977-) による実験的な散文作品『記号の木』*Tree of Codes* (2010) について、彼女はそれが英語版のみを使用したものであることから、「フォアはシュルツのことを記憶しているが、ほとんどの英語作家にありがちなように、ポーランドのことは忘れてしまっていて、それがゆえに、彼の読者にもポーランド語を忘れることを許してしまっている」と述べている。以下を参照。レベッカ・ウォルコウィッツ『生まれつき翻訳』佐藤元状・吉田恭子(監訳)田尻芳樹・秦邦生(訳)、松籟社、2021年、345-348ページ。しかし、この批判が妥当かどうかはともかく、ウォルコウィッツもまた、ここでシュルツのポーランド語がすでに外部の言語との関わりの中から生まれていることを忘れてしまっている。なお、フォアの『記号の木』については、加藤有子「歴史／物語の操作——ジョナサン・サフラン・フォアの小説の視覚的要素」『れにくさ』3号、2013年、226-242ページに詳しい。
- 2) Bruno Schulz, *Sanatorium pod Klepsydrą* (Warszawa: Towarzystwo wydawnicze Rój, 1937), 14. 訳文は工藤幸雄訳『ブルーノ・シュルツ全集1』新潮社、1998年、148ページをもとに一部変更した。

- 3) Bruno Schulz, *Ibid.*, s. 9. 邦訳, 144 ページ。
- 4) *Daisy: walc*, muzyka Harry Dacre, słowa Władysław Sterling (Warszawa : Wł. Holewiński, 1895), 2.
- 5) シュルツはゴンブローヴィチ Witold Gombrowicz (1904-1969) の小説『フェルディドゥルケ』*Ferdydurke* (1937) の書評の中で、中庭や台所で営まれる活動を「サブカルチャー」(podkultura) と呼び、あらゆる文化の母体に位置づけている。中庭や台所は女中や巡業芸人、物売りの仕事場であり、また家の住人が外部の人間と接触する空間でもある。すなわち、シュルツは移動を通じて人々が出会う空間に何らかの文化現象を見ており、それを「サブカルチャー」と名づけた。「フェルディドゥルケ論」『ブルーノ・シュルツ全集』前掲書, 583-595 ページ。
- 6) 「林檎の歌」の歌詞には無数のバージョンがある。ここでは以下の YouTube のページで視聴可能な日本語字幕付きの赤軍バージョンの歌を参考にした。ただし訳文は部分的に変更している。<https://www.youtube.com/watch?v=qLpBh-ghudw> [最終アクセス: 2022 年 5 月 31 日]
- 7) ロシア語版ウィキペディアの「Яблочко」の項を参照。<https://ru.wikipedia.org/wiki/Яблочко> [最終アクセス: 2022 年 5 月 31 日]
- 8) ウクライナ語版ウィキペディアの「Яблучко(пісня)」の項を参照。[https://uk.wikipedia.org/wiki/Яблучко\\_\(пісня\)](https://uk.wikipedia.org/wiki/Яблучко_(пісня)) [最終アクセス: 2022 年 5 月 31 日]
- 9) 1991 年のウクライナ独立後、ウクライナ領内に展開していた旧ソ連軍、とりわけ黒海艦隊の帰属をめぐるウクライナとロシアとのあいだで対立が生じたが、2014 年のロシアによるクリミアの併合以降、ロシア海軍に編入された。ウクライナ独立期における黒海艦隊の帰属問題については、中井和夫『ウクライナ・ナショナリズム』東京大学出版会, 178-181 ページを参照。
- 10) ウォルコウイツ, 前掲書, 17 ページ。
- 11) Vladimir Nabokov, *Look at the Harlequins!* (Harmondsworth : Penguin Books, 1980) 14. 訳文はメドロック皆尾麻弥訳 (作品社, 2016 年, 16 ページ) をもとに一部変更した。
- 12) レオ・ペルッツ『どこに転がっていくの、林檎ちゃん』垂野創一郎訳, ちくま文庫, 2018 年, 187 ページ。
- 13) 邦訳はヨーゼフ・ロート『果てしなき逃走』平田達治訳, 岩波文庫, 1993 年。
- 14) 「二匹のけだもの」を含むベルリン時代のベルゲルソンの小説については別稿で、より詳細に論じた。以下を参照。田中壮泰「イディッシュ語で書かれたウクライナ文学——ドヴィド・ベルゲルソンとボグロム以後の経験——」『スラヴ学論集』25 号, 2022 年, 63-82 ページ。
- 15) 7. ז. אפריל 1926, פארווערטס, צוויי רוצחים, בערגעלסאן, צוויי רוצחים, פארווערטס. 14. אפריל 1926, ז. 7.

